

思ひ草

第30号

令和元(2019)年11月20日 発行

現代国学としての人間開発学

人間開発学部副学部長 藤田 大誠



本学の校名「國學院」とは「国学を基盤とする学校」の謂に他ならない。国学とは古典の抜本的検討から発し、日本の根本を究明するため、天皇・神道と民との関係に基づく国柄や生活文化に関する研究を多彩な方法により蓄積してきた総合的学問であるが、その担い手である国学者は、教師教育や地域社会の教育についての歴史を考へる上でも重要な存在である。

ここでは、江戸末期において上州(群馬県)桐生のある商家(機屋)の姉弟が青少年期にどのやうに学び、成育して行つたのかを具に検討した研究(高井浩『天保期、少年少女の教養形成過程の研究』)を繙き、一つの事例を紹介しておかう。

この姉弟は、手習師匠の田村梶子がほぼ手弁当で営む「松声堂」(男女共学の手習塾)で初等教育を受けた。その学習内容は師匠自筆の「いろは歌」や各種往来物(教科書)、古今和歌集などを用ひ、習字を軸に読書や和歌、和文に互り厳しくも親切な指導を行ふもので、特に礼儀作法の躰は厳格であつた。

この師匠を慕ふ教へ子一同により天満宮境内に筆塚(顕彰碑)が建設されたが、梶子を「もの教ふる人」の鑑と讃へた撰文を書いたのは、彼女の師である橘守部であつた。守部は、本居宣長の学説を批判し独自の存在感を示した異色の国学者で、桐生に門人を有してゐた。梶子同様、姉弟の父親である吉田清助も守部の門下であつたため、姉弟は青年期に江戸の守部方に留学し、直接薫陶を受けることとなつた。守部は、姉弟の成長を見守りつつ愛情濃やかに訓育した記録を詳細に残したが、彼は自発性や潜在能力の開発、適切な躰を重視した幼児・家庭教育論(『待問雑記』)を物したほどの優れた教育者でもあつた。

複雑な諸問題を抱へる現代社会においてこそ、地域社会に根差した国学者たちの真摯かつ地道な学問と教育の実践といふ総合的な営みに思ひを致す必要がある。畢竟、国学者の後進としての國學院大學人間開発学部が構築を目指す「人間開発学」は「現代国学」の実践をその使命とすべきではないだらうか。

学校という社会資本に求められる「探究」の学び

教育実践総合センター副センター長 田村 学



2030年の近未来においては、想像以上の大きな変化が現実味を帯びてきています。そうした社会では、ただ単に知識を暗記し、それを再現するだけの学習を行つても社会で活躍できる人材にはなれそうにありません。あるいは、豊かな人生を送ることも難しそうです。知識の習得はもちろん重要です。しかし、これからの社会においては、身の回りに起きている様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力をもった人材が求められているようです。また、様々な知識や情報を活用・発揮しながら自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力をもった人材が求められているようです。そのためにも、自ら設定した課題に対して、自ら学び共に学び、その成果を自らとつなげる「探究」の学びをすることが大切になってくるのです。

こうした多様で豊かな「探究」の学びは、「未来社会を創造する主体としての自覚」を確かにしていくプロセスと考えることもできます。「探究」は変化する社会に対応する人材を育成することにとどまりません。社会の変化を受け身になって受容するのではなく、未来の社会、将来の社会を、自らの手で創り上げ、構築していくという極めて前向きで積極的な姿勢を育てることに役立つものと考えべきでしょう。まさに、「未来社会を創造する主体」を育てるのです。

これからの教育は、変化の激しい社会に対応できる人材の育成が求められています。その一方で、変化に対して受け身ではなく、そうした変化自体を生み出す能動的な存在であることも重要な人材像としてイメージする必要があるのではないのでしょうか。

教育実習

その時々「はじめの一步」を…

初等教育学科教授 杉田 洋

「杉田先生のお陰で、小学校で初めて友達ができました。本当にありがとうございました。そして、私のような子供のため、ぜひ立派な先生になってください。」

これは、今から40年も前、教育実習の最終日に、私のためにとお別れ会を開いてくれ、花束を贈呈してくれた6年生の女の子の手紙の一文です。今でも、大切に保管してあります。そして、これまで、その時々「はじめの一步」のとき、読み直してきました。

教育実習は、教師としての真剣勝負に挑む「はじめの一步」と言えます。学生は、その体験について、「楽しかった」とか「苦しかった」とか短い言葉で表現します。しかし、その裏には、子供たちと正面から向き合い、寄り添い、真剣に考えたり悩んだりした様々なことが詰まっているはずで、大切なことは、良かったことも、そうでなかったことも無駄なことは一つもなく「それらをいかにして次に生かすか」ということです。

ところで、今になって、あの6年生の女の子の期待にだけだけ応え「立派な先生になれたらどうか」と振り返ってみますが明確な答えは見つかりません。ただ、はっきりと言えることは、常にそんな先生でありたいと、子供たちと共に考え、悩み、笑い、泣きながら、たくさんの子供たちから多くのことを学びながら、よい教師人生が送れたということなのです。

作家の遠藤周作さんの言葉に「苦楽しい」という造語があります。苦しいことだけには、誰も真剣に取り組まないでしょう。しかし、楽しいことだけのことも、そう長くは続かないはずで、教師の仕事は、苦しいこともたくさんありますが、その何倍もの楽しさがあるのです。

皆さんも、これから何度となく苦しいことを超えて頑張ろうとすることがあるでしょう。つまり、そんな時々に必要なのが、「はじめの一步」なのです。教育実習とは、そんな「はじめの一步」を力強く踏み出すための心のよりどころとなる何かを見付ける場なのかもしれません。

教育実習を終えて

初等教育学科 3年 岡崎 武虎

私は東京都新宿区の小学校で2年生のクラスで実習を行いました。クラスの子どもたちはとても素直で明るく、最初に挨拶に行った時から積極的に話しかけてくれたり一緒に遊んだりしました。先生方も温かい方ばかりで、担当学年ではないにもかかわらず、質問をすると笑顔で丁寧に教えてくださいました。

教育実習では様々なクラスでの授業を参観させていただきましたが、どのクラスもまとまっていて雰囲気も明るく、日頃の学級経営の重要性を肌で感じました。

1週目の土曜日には運動会があったので、その週は運動会練習が多くあり、担当クラスの練習を見たり、時には私が指示を出したりすることがありました。しかし、当然ですが担任の先生のようにはいかず、まとめることの難しさを知りました。1人1人の意見を大事にすることはとても大切ですが、それだけではまともならず、その場で折り合いのつく方法を考え指示することがいかに大変か感じました。子どもたちはとても成長がはやく、月曜日には改善点が多かったものの、本番では徒競走、ダンス、応援合戦などどれも最高のものとなっていて、とても感動しました。

私が教育実習で一番印象深いのは研究授業です。準備の段階からどのような授業にするか迷いに迷って、指導案も何度も書き直しました。そしてその度に先生に何度もご指導いただきました。他クラスでの事前授業は大失敗し、授業内容、時間配分など滅茶苦茶で、とても見せられるようなものではなかったのですが、それでもお忙しい中夜遅くまで指導していただきました。しかし、研究授業では自分では気づかなかった課題がわかり反省点が多くありました。改めて先生方の凄さを感じるとともに更なる努力が必要であると実感しました。

教師としての時間の使い方や社会に出てから当然のマナーなども1つ1つ教えていただきました。実習でお世話になった先生方への感謝の気持ちを忘れず、少しでも近づけるように、教育実習での経験を生かすことができるよう精進しようと思います。

教育インターンシップ

2年生の学生は5月から教育インターンシップを始めています。教育や保育の現場で自分の目で見て感じて学び、大学での学びとの往還によって教育や保育への考えを深めていきます。

教育インターンシップを終えて

子ども支援学科 2年 江原 秀斗

私が、今回の教育インターンシップを終えて学んだことは、子どもたちの目線になって考え行動することです。全体を見て考え行動することも、もちろん大切ではありますが、時には子どもたちと一緒に遊び、一緒に活動することで子どもたちが一体何を考えているのかが分かるのではないかと感じました。子どもたちにも1人1人違う考えがあると思います。それらすべてを読み解くのは難しいかもしれません。しかし、寄り添って同じ目線になれば、全く分からないということにはならないのではないかと感じました。寄り添った結果、子どもたちが成長してくれると、まるで自分のことのように嬉しく感じました。

また、私は子どもたちと関わる際には、子どもが自分で一生懸命考え、それでも分からなかった際にサポートをするよう心掛けました。なかなか自分で答えを導き出せない子どもの中には、「答えを教えて」と私に聞きに来る子どももいました。そのため私は、すぐに答えを示さず、ヒントを提示し、子どもたちが答えを導き出せるようにサポートすることが出来ました。

出来なかったこととしては、教育インターンシップ初日、歌とダンスの活動があったのですが、初日だったため、分からないことや恥ずかしいこともあり、しっかりと取り組めませんでした。しかし、担当の先生にそのことを指摘され、次の週から分からないなりに一生懸命に取り組んでみました。この経験から、出来なくても、何事にも誠実に向き合うことの大切さを学びました。

私は現在、小学生にホッケーを教えています。日ごろから子どもたちと関わるので、教育インターンシップの経験を、保育の場だけではなく、ホッケーの指導などでも取り入れて、意識して子どもと接しています。また、これから行う保育実習や教育実習でも一生懸命子どもたちと関わっていきたいと思います。

実際の現場で活動して分かること

子ども支援学科 2年 松岡 理子

私は保育所において、6月から8月の2週目まで、主に毎週火曜日に1回4時間又は2時間のペースで教育インターンシップの活動をさせて頂きました。全10回の活動で3歳児、4歳児、5歳児クラスの様子を見学することが出来ました。

私が教育インターンシップを通じて身をもって感じたことの1つ目は、たった数ヶ月で子どもたちは大きく成長することです。初日から3回と最終日の計4回を3歳児クラスで活動しました。6月に初めて活動した時は、排泄や衣類の着脱の自立がまだで、介助が必要であった子どもが2ヶ月経ったら出来るようになっていたり、前よりも先生の話を理解して行動出来るようになっていたりしました。たった2ヶ月で子どもが成長している姿を見て、私はとても驚きました。

2つ目は、一人一人の背景に応じた関わりをすることが大切だということです。それぞれの好きなものや苦手なもの、発達の個人差を常に念頭において先生方は保育をされていることが活動を通じてとてもよく分かりました。特に印象的だったのは午後食の時間の出来事です。私と同じ班で午後食をとった子どもの中に、食事があまり進まない子どもがいました。おかげで野菜が入っていたので、きっと野菜が苦手なのかな?と思いました。私はどのように言葉掛けすべきか、分かりませんでした。あとから、先生にどうすべきだったのか伺ったところ、その子が普段から野菜が苦手な食べられないのか、本当は食べられるけれどその時の気分で食べたくないのか、普段からの様子を踏まえて関わるのが大切だと教えて頂きました。

実際の現場で活動することによって、大学で学んできたことが実感出来たり、反対に、座学では気づけないことが分かりました。今回の活動を通じ、私は子どもたちの様子を普段からよく見て、一人一人が持つ背景に応じて関わることができ、視野が広く臨機応変に対応できるような保育者を目指していきたいと思いました。



成田信子 学部長 あいさつ



田村学 教授 基調講演



全体会場

夏季教育講座の過去、現在、そして未来

教育実践総合センター長 高山 真琴

教育を見据え、子どもの「生きる力」を拓いていくことは、教育に携わるすべての者に課せられた課題です。夏季教育講座は、専門家、卒業生を含む現場の先生方、そして学生が参加し、今日的な教育の課題を考える学びの場として、本学部が創設された平成21年からフォーラムの形をもって続いてきました。

これまでの10年間は、講座のテーマを教科や領域に絞って設定してきましたが、第11回を迎える今回からは、3年に渡り『新しい教育課程の基準とこれからの教育・保育』を核のテーマに据え、より具体的な年次テーマを設定していくこととなりました。

第1年次となる今年度は『育成を目指す資質・能力と評価』をテーマとして設定し「幼保小連携」「算数」「音楽」「道徳」「特別活動」「特別支援教育」の六つの分科会を立ち上げました。今期の学習指導要領改訂のポイントのひとつに「育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に整理し、すべての教科等の目標と内容をその柱に沿って明文化したこと」が挙げられます。このポイントを踏まえ、「何を学ぶか」、「いかに学ぶか」を確認するとともに、「何を学んだか」という到達度を「いかに見とるか」についての検討が各分科会で行われました。

今回、400人を超える参加者と、共に学び合える喜びを実感できたことは実に喜ばしいことでした。教育の現場が学び合う楽しさに溢れ、子どもたちが生き生きと生きる力を育める場となれるよう、これからも夏季教育講座を通して教育現場に資する情報を提供していきたく思います。

今回は『子どもの育ちや学びとカリキュラム・マネジメント』を第2年次のテーマと定め、令和2年7月19日(日)に開催を予定しています。多くの方々がご参加くださることを心から願っています。



第1分科会 幼保小連携



第2分科会 算数



第3分科会 音楽



第4分科会 道徳



第5分科会 特別活動



第6分科会 特別支援教育